

「相中相高百年史」より
(戦時体制下の相馬中学校 11)

10 学徒動員：三年生（相中第45・46期生等）・・・ペンをハンマーに
《 横浜・海軍航空技術廠支廠へ出動 》

(2) 海軍式の寮生活に耐えて

このときの様子を齋藤清明^(※1)はこんなふうに綴っている。

我々の宿舎であった白山道寮は、二十四棟二階建木造の建物で寒い冬でも暖房は何一つないところだった。代わる代わる裸電球を掴んで一時の暖を取ったことが思い出される。

この寮生活の毎日は、次のようにして始まる。

「総員起こし五分前、総員起こし五分前……」

冷えきった廊下の空気を突き破って、スピーカーから起床五分前の予告が流れる。

まだまだ眠い。もっともっと寝ていたい……。が間もなく無情にも、

「総員起こし、総員起こし」の音が響きわたる。

午前六時。起床時間である。この合図で飛び起きる。さもないと、あとでとんでもない目に遭うことが分かっている。寝ている奴はいない。布団畳みは競争だ。自分の布団をくるくるっとひんまるめる。押し入れに近い者が、さっとその戸を開ける。そして、まるめた布団をぼんぼんと放り込む。その速いのなんの、その間僅か一分少々。

続いて点呼の時間だ。寮長が回って来る。彼は年の頃二十歳ぐらいだったろうか。気合いのはいった恰幅のいい美男子の松淵さん（秋田県人）だ。彼の任務は、寮生の部屋別の点呼・部屋の整理状況の点検・寮生の健康管理等である。

各部屋毎、素早く廊下に整列。寮長が班の前に立つ。部屋の班長が、

「第〇班、番号」と号令をかける。

「一、二、三……」どの班も六～八名いたようだ。班長は

「第〇班〇名夜勤勤務〇名、異常ありません」と報告する。

「よっチッ……」松淵寮長は秋田訛で人員確認。

ついで、人一倍大きな目玉で部屋の中をギョロリ。畳みかけの布団がみつかったら大変……。

「誰だア、これは。この者、前に出ろ。てめえらおれをなめてんのかアこの野郎……」

大きな雷と同時に往復ビンタが飛んでくる。油断も透きもありはしない。寮長は我々にとっては、最も怖い存在の一人であった。

点呼が終わって部屋の掃除・洗面、所要時間は十分。終わるや否や駆け足で寮前広場に集合し「朝の集会」である。ベルの合図で八百人の寮生が各寮から集まってくる。すべての行動は駆け足、これが海軍方式とのこと。

広場の式台には、週番将校（海軍技術中尉等）が立つ。各寮長が順に人員報告。

「宮城遥拝。宮城に向かって最敬礼」

週番将校の号令のもと、深々と頭を下げたのである。

「続いて全員、故郷に向かって敬礼」

これは、故郷に向きを変え、両親、家族への挨拶をする時間だ。このとき、真っ先に浮かぶのは母親のことだ。母は病弱で床に伏して長い。病状はどうなっているだろうか。悪くなっていないだろうか……。

(結局昭和二十年十二月逝去)

弟のことも心配だった。まだ一才の乳飲み子で、病気の母親からはろくろく乳ももらえないだろう。その上 1863 年（文久三年）生まれ 81 才の祖父の手では、オシメはうまく取り替えられないだろう……。

家族の安否を気遣う時でもある。

「俺は元気に頑張っているから安心してくれ」

と念じつつ報告を終わる。

……………

「朝の集会」のときは、週番将校からの檄に等しい訓辞があり、つづいて海軍体操だ。

この海軍体操は、どんなに寒い朝でも上半身素っ裸である。とても寒かった。

士気を鼓舞するために「白山道寮歌」も歌ったように記憶している。

一、 ああ釜利谷（かまりや）の若桜 咲いて祖国のために散れ
あつき精神（こころ）に燃え立ちて 我ら集えり 集えり我等 その名栄ある 白山道

……………

これが終わるとようやく朝食である。いつも量の少ない食事で空腹を抱えている食べ盛りの中学生だ。

食事の時間が待ち遠しい。食器は金属製。さらっと盛られたご飯とおかずを順番にならんで受けとる。

はじめの頃はまあまあであったが、段々ひどくなっていった。

その内容は「大豆を絞った後の豆粕入りのご飯」と「腐った臭いのするニシンの煮付け」等で、食べるとすぐジンマシンになった者もいた。

因みに、この豆粕は当時肥料・飼料用であったとか。この時代、我々は家畜なみの待遇で働いていたことになる。

齋藤彰^(※2) は、当時の寮生活を次のように述懐している。

昭和二十年三月十日の東京大空襲に続き、空襲は日増しに激しくなり、我々のいた横浜も例外ではなかった。

空襲のたびに、たたき起こされて、寮の前にある防空壕に退避させられることの、何とつらかったことか。

特に冬の夜、冷たい雨に濡れながらの退避はいやだった。このまま寝て居たいと何度思ったか知れない。

こんな生活を送っていた我々の楽しみは、日曜日の外出だった。

横浜、伊勢佐木町、日の出町界限での散歩、また鎌倉の八幡宮や大仏周辺の散策、さらに江の電に乗っての江ノ島めぐり等は、空腹を抱えながらではあったが、我々にとっての大きな楽しみであった。

当時は、食糧難時代で、食物を手に入れることは至難の技であった。そこで、薬店で売っていた「わかもとの錠剤」の大瓶を買い、その錠剤一握りをポケットに入れて外出、腹の足しにと一粒ずつかじりながら、鎌倉八幡宮の前の段かざらを歩き、土産物店をみてまわったことなど、今でも懐かしく思い出される。

(※1) 中第 45 回 昭和 21 年卒 高平出身

(※2) 中第 45 回 昭和 21 年卒 中村出身